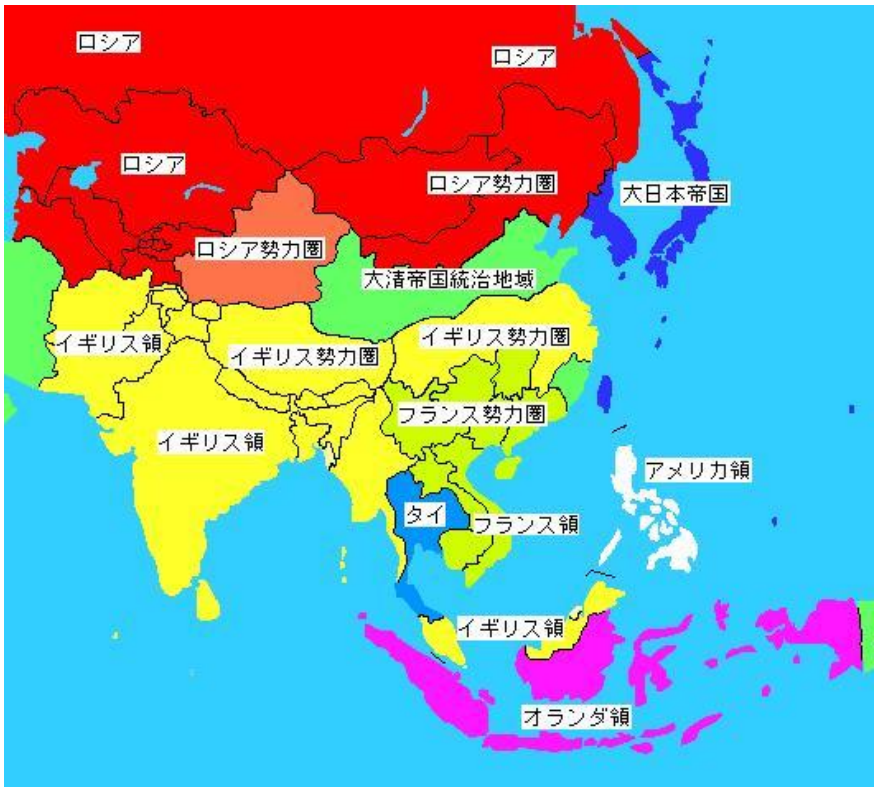
【人物から学ぶ歴史】序論

歴史は人が創る。人を知ることは、歴史の深みを察することになる。輝かしい近代日本を創るのに戦った、又は関わった人物を我々は知り、学びたい。特に明治時代の経済にしろ、戦争にしろ、想像を絶する奇蹟を生み出したこの時代の人物像や当時の国柄を民族の智慧として、又誇りとして心の底に留めたい。想うに近代日本を急速に創る為に、力による欧米列強の侮蔑的圧力に、忍耐に忍耐を重ねた国民の方々は現代の国民性から見ると、誠に奇蹟に映るであろう。この様な忍耐強さは、当時の日本人一人一人が亡国の危機に瀕している事実を感じ取る知性と誇りを内包していたからであろう。



20 世紀初頭の欧米列強によるアジアの植民地支配

現在、国会議員の中には日本の内憂外患の現状に危機感を抱いていない立派なお方が少なからず存在し、昭和時代の特攻で南海に散った青年達を無駄死にと評する如き無知蒙味な害国人の様な議員の事を考えれば、明治の一般の人達は実に立派であり、恐らく、特攻隊の青年のような純なる愛国心と悲想な覚悟をもって毎日を生きておられたのであろう。この様な国民の後ろ楯があったから

こそ政治家も軍人も、各々の**「力量」**を発揮できたはずである。特に注目されるのは、世界、特にアジア諸国に大きな影響を与えることになる（ドイツの鉄血宰相ビスマルクも避けた）世界一の陸軍を持つロシアとの無謀とも言える戦争を、アジアの片隅に生まれたばかりの弱小国の日本が奇蹟の勝利を拾ったことであろう。

この奇跡の勝利は不思議な事に、神がこの国に超一流の人物・天才奇才の人物を多く生ましめた結果であろう。天才肌の人物の代表者は**秋山好古・真之兄弟、**や**児玉源太郎、山本権兵衛**であり、超一流の人物とは西郷隆盛の実弟、**西郷従道・大山巌・杉浦重剛（しげたけ）**などであろう。

天才肌の人物で特筆すべきは**児玉**である。乃木の如く人格者ではなく、所構わず立ちションや周囲を怒鳴り散らしたりと、品位には多少問題はあるが、徳山藩（長州の支藩）出身で、日本軍人としての歩みは軍曹からの出発で他の軍人とは異なり、如何なる学校にもゆかず、読書もせず、独習で戦略戦術を会得した定型外の名作戦家であり、日露戦争では陸軍最大の功労者で、この戦の為に天が下した人物だとまで賞賛されている。

この時代奇蹟が重なるのだが、陸海共に実務家である**「天才肌の人物」**に全幅の信頼で**任せ切る肚の決まった「超一流人物とのコンビ」**とそれを取りまく一団となって団結した**「将軍達のチーム」**が生まれていたのである。これが日本の勝利の原因であろう。陸軍では**「大山―児玉」**のコンビとそれを支える**「将軍チーム」**。海軍では、西郷従道―山本権兵衛―東郷平八郎とそれを支える「各艦隊の**司令官達のチーム**」である。我々が学ぶべきは、天才・奇才を見抜く**「眼力」**と**「任せ切る肚」**をもった**「超一流の人物」**を**「生みだす」**国創り、人創りだ。

江戸末期から維新にかけては、人物を生み出すための教育や環境が日本は整っていた。若者が成りたいと志す人物も多く実存していた。従道も巌も己の志す人物が身近に居たのだ。

日本を駄目にしたのは、大正時代から始まる西洋物質文明思想の必要以上の**「憧れ」**から生じる猿真似で、**損か得かの価値判断**しか出来ぬ**超個人主義**に侵されて、日本の古き良き文化を下に見て劣等感を抱き、徐々に日本精神が蝕まれ、戦後 GHQ によって完全に日本精神は否定されて久しい。我々は今、少なくとも日本人が**「このような人物に成りたい」**との人物像を自らも学び、外に拡散し、日本式教育に戻す運動をすべきである。

志雲会理念でもある、西郷南洲翁の遺訓、中略・・・・**人は第一の宝にして、己れ其の人に成るの心掛け肝要なり。**・・・・は歴史教育を志す人にとって人物像を学ぶ大切さを示している。今日本では、教科書で人物から学ぶ教育がなされていない。

注）西郷南洲翁遺訓
西郷隆盛の遺訓集。出羽庄内藩の関係者が西郷から聞いた話をまとめたもの。遺訓は 41 条、追加の 2 条、その他の問答と補遺から成る。上記の引用は第 20 条。

幕末から明治の維新に於ける人物を学ぶ必要性は次の如くである。日本は明治を迎え民主主義国家になり、戦後も議会制民主主義国家となった。日本が将来も国家として民主主義を選ぶならば、「年頭の辞」（平成 28 年 1 月 29 日の講演参照）でも記したように、民主主義は特に一人一人の人間が成熟し、良識ある判断が出来る教養ある人間であるとの条件があってこそ成り立つ社会である。だからこそ特に人物教育が必要なのである。民主主義は**「個の優劣で国柄が決まる」**事と「明治、平成という改革を必要とする共通の時代背景が似てる」と言うこと等が明治の超一流の人物を学ぼうとする理由である。**国を変え**ようとすれば**個を変える教育**が必要なのである。個は歴史上の人物を己の生きる指針として、心に抱き続け、その人物に近づけるよう生きることが大切であろう。

今回から日露戦争を予測し、海軍を世界の一流海軍に育てる為の改革を命じた西郷従道と山本権兵衛のコンビについて学びたい。この人物伝は一回では終わらない。それは余りにも「従道」の人物の奥深さからくるものである。

西郷従道伝　前編

西郷従道は、日本史上の大人物南洲公の「かげ」に隠れている故にどれ程の人物かを知る人は少ない。兄ほどではないにせよ、従道もまた一世の人物であり、明治の一巨人であった。表に出る事を嫌う故に従道について書かれたものは極めて少なく不明なところが多いが、実に不思議な魅力をたたえた興味尽きない人物である。従道は「政府の要石（かなめいし）」とか「内閣の鍋釜」といわれた。昔は鍋と釜がなければ所帯をなさないとの意味からである。

西郷従道

歴代の政府に従道の存在しない時はほとんどなく、必須不可欠の存在であった。明治 11 年から参議を務め、文部、陸軍、農商の大臣を務め、大臣でなかったのは 2 年間だけで、しかもこの間、海相と内相を歴任、ことに海相は 10 年以上務めた。通算すると 20 年間大臣を務めた人物は他に居ない。重要視された人物故 2 度首相就任を求められたが、2 度とも**「お門違いでしょう」**と断り、決して首相になろうとはしなかった。如何に当時の人々から敬重され、親愛されたか、色々な話が残されているが、一番の功績は日本海軍を、ロシアとの戦いを予見し世界一流の海軍に育てたことである。

従道は山本権兵衛の人物と才幹を認め抜擢、やがて後任の海相とした。山本は大佐の地位での海軍の大リストラを行った切れ者で、従道に次ぐ明治海軍建設の一大功労者であったが、抜群の才能手腕の持ち主だけに自信が強く傲岸不遜（ごうがんふそん）で人を人とも思わぬところがあり、角の多い風変わりなこの人物は恐らく従道と言う庇護者がもし居なかったら、二等巡洋艦の艦長ぐらいで退役になっていたかもしれない。

西郷隆盛、従道、従弟の大山巌の三人は薩摩人の一典型をなしている、**「将帥の性格」**の如きものがあるようだ。有能とか功績とかの基準では計れぬ大器計量不能な何ものかがあるのであろう。天才的な実務家を見い出し、やり易い様に場を作ってやり、何もかも任せ切り、場を作る政略のみを担当し、もし実務家が失

敗すればさっさと腹を切るという覚悟を決め込む。己を無にする風懐が能ある者の才を生かすのであろう。

注）西郷隆盛、大久保利通、西郷従道、大山巌、東郷平八郎、樺山資紀、黒木為楨、村田新八、山本権兵衛、有馬新七、牧野伸顕らが現鹿児島市鍛冶屋町出身。司馬遼太郎は「いわば、明治維新から日露戦争までを、一町内でやったようなものである」と述べている。

従道も山本を生かし切った。従道は世に大きく顕われていなくとも時代を奥底で動かし、天才的実務家としてのキーマンを見い出す眼力は「史眼の輝き」と評しても過言ではなかろう。『従道は物事の本質を見抜くのが上手だった。その要（かなめ）だけを握って、あとは「春の野」の「そよ風」に吹かれているような顔をしている。』…が従道評である

傑物山本の唯一頭の上がらない人物が西郷従道であり、明治政府第一人者伊藤博文が最も憚ると共に最も頼りにしたのは西郷従道であった。伊藤もまた近代日本の英雄を以て自任し、眼中人なき感のあった人物だが、従道だけには並々ならぬ敬意を払った。従道も又伊藤と信頼し合い、互によく協力した。

伊藤博文

伊藤との間には面白い話が多いが、その一つは次のとおり、伊藤がドイツでビスマルクに会ってから大のビスマルク贔屓（ひいき）になり、葉巻の吸い方まで

ビスマルクに似てきたと言われた頃のことである。伊藤は何かいい話がある時は従道に聞いてもらう事を好んだ。東洋のビスマルクを以て窃かに任ずる伊藤の話を、何時もの通り「なるほど」「なるほど』と聞いていた従道は「なるほどビスマルクはおはんにより似ちょりますのう」と真面目な顔で言った。従道はビスマルクに夢中になっている伊藤をそれとなく諷諫したのである。これには伊藤も閉口して「従道がなるほど、なるほどと謹聴している時は、油断がならん。」とぼやいた。

次に続く。

平成 28 年 2 月 26 日

志雲会塾長　有馬正能